

主の昇天

2010. 5. 15 (土) 18:30 ミサ

5. 16 (日) 7:30 ミサ

高円寺教会

ルカ 24・46-53

今日は「主のご昇天」をお祝いする祭日ですが、第1朗読「使徒言行録」と「ルカ福音書」の双方に、イエス様のご昇天の場面が出てきました。「使徒言行録」は今日（きょう）の「聖書と典礼」の解説にもあります通り、「ルカ福音書」の著者、まあ「ルカ」と言っておきましょう。そのルカが、福音書の続編として書いたものです。同じ人、あるいはグループが書いたものなんですね。つまりルカは、自分の一方の作品ではエピローグとして、またもう一方の作品ではプロローグとして、この「イエス様が天に昇る」「イエス様の姿が見えなくなる」という出来事を記しているのです。これは実に象徴的なことです。「主の昇天」とは、一つの時が終わり、一つの時が始まる地点であり、神様が歴史の流れを通して私たち人間を救おうとされる「救いの歴史」の上でも、非常に重要なターニング・ポイントであります。つまり、それまでイエス様から教えを受け、イエス様について行くしか術（すべ）のなかった弟子たちが、いよいよ本当の意味での使徒として、父と子から送られた聖霊の力によって、イエス様の教えと行いを全世界に証しする者に変えられていく、「イエス様の時代」から「教会の時代」への転換点、それが「主の昇天」という出来事だったのです。

しかし同じ「ご昇天」を描いてはいるのですが、読んでいただくと分かる通り「使徒言行録」と「ルカ福音書」では描き方が少し違っています。先ず第1朗読の「使徒言行録」を見てみますと、「ルカ福音書」と一番違うのは、イエスが天に上げられた日が「ご復活から四十日後」とはっきり書かれていることです。現在の教会の暦「典礼暦」は、このルカが「使徒言行録」に記した四十日に合わせて、イエスの昇天を復活祭から四十日後にお祝いしています。ま、この日本ではみんなが教会に来やすい日曜日にずらしてお祝いしていますが。ともかく、この「使徒言行録」に記された四十日という日数をもとに、教会の暦は決められました。しかしながら、歴史的事実として復活したイエスが現れた期間が四十日だったかといえ、それは必ずしもそうではなかったと思います。ご存知のように「四十」という数字は旧約聖書の時代より、例えば「ノアの洪水」の四十日四十夜、「出エジプト」の四十年間など、「聖なることが行われる期間」を表す数でした。つまり「使徒言行録」における「四十日間」は、イエスご自身が宣教された時代から、使徒たち、つまり教会が聖霊の力を得て宣教する時代への橋渡しの時として、特別視しているのです。このように、今日の第一朗読「使徒言行録」は、「時の移り変わり」というものを強調してから、使徒たちの働きの報告へとつなげていきます。

一方「ルカ福音書」では、復活されたイエス様が弟子たちに現れた日数を正確に記していません。それどころか読みようによっては「ルカ福音書」の復活から昇天までの場面は、一日のうちに起こったこととして読むこともできるのです。四十日と一日、ずいぶん開きがありますが、これを「本当はどっちだったんだ」と問うのは野暮ってもんです。つまりこの両者は「主の昇天」を通して読者に伝えたいことが異なっているということです。「ルカ福音書」で伝えなかったのは、イエス様が以前と同じ存在として生きておられること、しかもそのイエス様は十字架の苦しみした後、死者の中から立ち上がり、私たちの罪を贖い、そして永遠に私たちと共にいてくださる「主」なのだということではなかったでしょうか。それが証拠に、主の昇天に際しての弟子たちは、イエス様が自分たちから離れてしまったのに「大喜びした」と書いてあります。このときの弟子たちには確信がありました。イエス様の体は自分たちから離れても、主イエス・キリストという存在はもはや自分たちから離れることはなく、自分たちは主と一つなのだという確信です。昇天に当たってイエス様は弟子たちを祝福します。そして弟子たちは天に還るイエス様を伏し拝みます。「使徒言行録」にあるような、いつまでもイエス様の昇った天を見上げる、言ってしまうと「未練がましき」のようなものは「ルカ福音書」にはありません。あるのはイエス様と弟子たちの絶対の信頼関係です。もちろん弟子たちが決定的に強められ、本格的に宣教に旅立つきっかけとなる「聖霊降臨」までにはなお十日の期間があり、「主の昇天」と「聖霊降臨」の狭間で宙吊りになっているという意味では、「使徒言行録」に描写されている弟子たちの姿の方が事実に近いかもしれません。しかし「ルカ福音書」における弟子たちは既に知っています。イエス様が神のひとり子「主」であると。そのイエス様が約束された聖霊は必ず自分たちを満たし、福音を告げ知らせる力を与えてくださると。この信仰は正しく現代を生きる私たちの信仰でもあるのです。

私たちはイエス様が「主」であることを知っています。そして父と子の愛の力「聖霊」が私たちの内におられることも知っています。その意味においては、私たちの確信は「使徒言行録」の弟子たちよりも強いはずです。私たちはいつまでも「天を見上げて立って」いてはなりません。主イエスキリストは「生きている人」ではなく「生きている存在」として、いつも私たちと共におられるからです。私たちのために苦しみを受け、復活されたイエス様と共に、罪の赦しを得させるための悔い改めに人類を招いておられる神の無限の愛を、世界に証することができるよう、このごミサで共に祈りましょう。

カトリック高円寺教会
助任司祭 林 正人